

学会ニュース

目次

・ 第33回大会について	1
・ 第33回大会共通論題「表象、その多義性、変容と展開の諸相」 (趣旨説明)		
	鷺見洋一	2
・ グラーツ大会情報	3
・ 2011年グラーツ大会での日韓共同セッションについて	長尾伸一	6
【エッセー】		
・ 翻訳のことなど	今野 佳代子	7
・ Spring has come.	崔 康勲	10
・ ラセラス王子の新たな旅	原田 範行	12
・ 事務局より	14

第33回大会について

来年度の第33回大会は、2011年6月18日(土)、19日(日)に立教大学で開かれる予定です。開催校責任者は坂倉裕治会員です。

共通論題は「表象、その多義性、変容と展開の諸相」で、コーディネーターは鷺見洋一会員です。19日(日)を充てる予定です。(次ページの趣旨説明をご覧ください。)

詳細は、同封の大会プログラムをご覧ください。

多くの会員が大会に参加されることを願います。ご出席は同封の葉書でお知らせください。5月23日(月)までに事務局にご返送ください。

表象、その多義性、変容と展開の諸相
(趣旨説明)

鷺見洋一 (中部大学)

先頃、勤務先の大学でネパール人の夫婦が母国に現存する先住民族について興味深い報告をしてくれた。総数たったの167名という遊動部族「ラウテ族」は、猿の肉を食べ、森から森へとたえず移動し、経済活動は物々交換しか知らない。目で見、手で触れるものしか信じない「直接性」の人間たちなのだ。そのラウテ族に最近貨幣経済が侵入した結果、直接性信仰が崩壊し、部族全体が「間接性」で営まれる市場経済という表象システムに取り込まれてしまったのである。ラウテ族の伝統的な共同体が瓦解する日も遠くないという。

ラウテ族のエピソードに象徴されているのは、「近代化」と呼ばれる一連のプロセスが、「直接性」を犠牲にして、「媒介」や「代理」を特徴とする「間接性」の表象世界を現出させるにいたるとのことだ。

そもそも表象 (representation) とは大別して、1: 「心に思い浮かべる → 表現、表示」系列と、2: 「代表、代理」の系列とに分かれるが、両者はなにかの「再現」「象徴」であることにおいて共通している。近代ヨーロッパで、この特長が「近代」の諸問題と直結するのは、大革命以後、人間の精神活動、社会生活、政治活動において、「直接性」が通用しにくくなり、すべてが何かを媒介にして行われる「間接性」で定義され、定位されるようになった事情に通底している。以下、实例を挙げる。

1: **身体**の領域: 「神に捧げる身体 (聖テレサ)」から「解剖され、観察される身体」へ。2: **政治**の領域: 絶対主義、絶対王政から、代表制・議会制民主主義へ (国王一人の直接統治から、代表を選んで政治を行う間接政治へ)。3: **経済**の領域: 貨幣経済から紙幣経済へ (「実質価値を備えた貴金属」から「紙という無価値で間接的な媒体」へ)、あるいは「物々交換」から「市場取引」へ。4: **絵画**の領域: 写実から抽象へ (「写真のように対象を描く」から「モデルや対象のない絵画表現」へ)。5: **音楽**の領域: 平均率 (「主和音を主体にして構築される和声システム」から「平等な12音列システム」へ) 6: **文学**の領域: シニフィエからシニフィアンへ (「意味されるもの」から「音や形式の遊び」へ)。7: **伝達メディア**の領域: 口頭の談話から活字文化へ (「サロンやカフェ」から「日刊新聞やラジオ」へ)。8: **空間意識**の領域: 家族・近隣・同業組合から、国民国家の「祖国」、ひいては「人類」へ。9: **時間意識**の領域: 江戸時代の「刻」からグリニッチの「標準時」へ。10: **世界認識**の領域: 「量」 (産業革命、大量生産と大量消費) から「速度」 (計時の習慣、スポーツ競技、自動車レース、など) へ。

以上の多様な領域にわたる地殻変動は、例外やズレや逆行などの現象を随伴し、また必ずしも18世紀という時代の枠内だけで説明できるものではない。シンポジウムには4名の会員をお招きして、それぞれの立場から、「表象」の東西を自在に語って頂く予定である。

国際18世紀学会グラーツ大会情報

2月半ばに届いた、大会本部からの第5回ニュースレターの文面です。

++++++

Welcome to the fifth newsletter!

Contents:

- Important notices
- Congress programme/Time table (as of February 2011)
- Discount flight bookings
- Next newsletter

Important notices

- All congress participants – **this includes those who have proposed a session or a workshop and those who have applied to give a presentation, as well as everybody else** – are asked to register by the 30th of April at the latest (see link on the congress website: “registration”). Those who are not officially registered by the 30th of April cannot be included in the final congress programme.
- Please note that the bursary committee works independently of the local organisation; therefore the congress office is not able to answer any questions regarding the decisions of the bursary committee at this time. The decisions of the bursary committee will be publicised, however, as soon as they are known.
- Further information about booking excursions will be available on the congress website from the 1st of April.

Congress programme/Time table

Sunday, 24 July

Congress Office Opening 16.00-20.30 h

Welcome Drink 19.00-20.30 h

Monday, 25 July

09.00 Opening ceremony

09.30 First Plenary lecture

11.00-12.30 Sessions/Workshops

14.30-16.00 Sessions/Workshops

16.30-18.00 Sessions/Workshops

18.30-20.00 Book Presentation

Tuesday, 26 July

09.00-10.30 Sessions/Workshops

11.00-12.30 Sessions/Workshops

14.30-16.00 Sessions/Workshops

16.30-18.00 Sessions/Workshops

20.00 Concert

Wednesday, 27 July

09.30-10.30 Second Plenary lecture

11.00-12.30 Sessions/Workshops

13.30- Excursions

Thursday, 28 July

09.00-10.00 Third Plenary lecture

10.30-13.30 General Meeting of ISECS

14.30-16.00 Sessions/Workshops

16.30-18.00 Sessions/Workshops

19.00-21.00 General Reception

Friday, 29 July

09.00-10.30 Sessions/Workshops

11.00-12.30 Sessions/Workshops

14.30-16.00 Sessions/Workshops

16.30-18.00 Sessions/Workshops

18.00-18.30 Closing Ceremony

20.00 Concert

Discount flight bookings

The Graz travel agents Optimundus will not only search out the best and cheapest flights, they are also offering a 50% fee reduction for conference members.

Please contact their office as soon as possible at:

m.haselwander@optimundus.at

m.gissing@optimundus.at.

Next newsletter

The next newsletter will be published at the beginning of May 2011. In the meantime, please do not hesitate to contact us if you have any questions: 18thcc.office@uni-graz.at.

++++++

Nous avons le plaisir de vous présenter notre cinquième lettre d'information.

Contenu:

- Informations importantes
- Programme du congrès/ Calendrier (Février 2011)
- Offres de voyage
- Prochaine lettre d'information

Informations importantes

- Tou(te)s les participant(e)s – soit **les personnes qui ont annoncé une section, un workshop ou une communication ainsi que tou(te)s les autres participant(e)s** – sont prié(e)s de s'inscrire au plus tard

jusqu'au 30 avril sur le site web du congrès (voir le lien « inscription »). Les personnes non officiellement enregistrées ne pourront être intégrées dans le programme définitif du congrès.

Le comité des bourses travaille indépendamment de l'organisation locale; le secrétariat du congrès n'est dès lors pas en mesure de communiquer des informations avant de les avoir lui-même reçues. Les réponses seront quoiqu'il en soit communiquées à temps aux candidat(e)s.

Des informations supplémentaires concernant l'inscription aux excursions seront disponibles sur le site du congrès à partir du 1^{er} avril.

Programme du congrès (Table chronologique)

Dimanche, 24 Juillet

16.00-20.30 Ouverture du bureau du congrès

19.00-20.30 Apéritif de bienvenue

Lundi, 25 Juillet

09.00 Cérémonie d'ouverture

09.30 Conférence plénière No.1

11.00-12.30 Sections/ateliers

14.30-16.00 Sections/ateliers

16.30-18.00 Sections/ateliers

18.30-20.00 Présentation d'ouvrages

Mardi, 26 Juillet

09.00-10.30 Sections/ateliers

11.00-12.30 Sections/ateliers

14.30-16.00 Sections/ateliers

16.30-18.00 Sections/ateliers

20.00 Concert

Mercredi, 27 Juillet

09.30-10.30 Conférence plénière No.2

11.00-12.30 Sections/ateliers

13.30- Excursions

Jeudi, 28 Juillet

09.00-10.00 Conférence plénière No.3

10.30-13.30 Assemblée générale de la SIEDS

14.30-16.00 Sections/ateliers

16.30-18.00 Sections/ateliers

19.00-21.00 Réception générale

Vendredi, 29 Juillet

09.00-10.30 Sections/ateliers

11.00-12.30 Sections/ateliers

14.30-16.00 Sections/ateliers
16.30-18.00 Sections/ateliers
18.00-18.30 Cérémonie de clôture
20.00 Concert

Offres de voyage

L'agence de voyage Optimundus à Graz est à votre disposition pour planifier votre voyage en avion à Graz et chercher les offres les plus avantageuses ; vous bénéficiez d'une réduction de moitié des frais de traitement du dossier.

Le cas échéant, veuillez vous adresser dès que possible à l'agence:

m.haselwander@optimundus.at

m.gissing@optimundus.at.

Prochaine lettre d'information

La prochaine lettre d'information sera publiée sur le site web début mai 2011. Pour toute question, n'hésitez pas à vous adresser au secrétariat du congrès (18thcc.office@uni-graz.at).



国際18世紀学会グラーツ大会での日韓共同セッションについて

長尾伸一（名古屋大学）

前号でも紹介されたように、日韓18世紀学会はグラーツ大会で共催するセッション”Public knowledge in the East and the West: a comparative perspective”に向けて、準備を進めているほか、韓国学会が独自に企画するセッション”In and out of time: East and West”にも日本側報告者が参加することになった。

これに基づいて2011年2月12日には、高橋会員が研究代表者である科研プロジェクトの一環として、二つのセッションの日韓の報告予定者が名古屋大学に集まり、準備会合を開いた。その場で各自の報告要旨を紹介した上、各セッションでの報告者を確定し



翻訳のことなど

今野 佳代子 (司書)

だいぶ古い話になるが、フランス革命200年の記念行事が行われていた頃、私は国立大学の附属高校の図書室で司書として働いていた。工業高校なので生徒の興味はどうしても理系の本に向いてしまう。何とか文学、哲学や歴史の本にも興味を向けて欲しいと思ってテーマを決めて関連図書の展示を試みていた。良い機会だと思って「フランス革命関連図書」の展示をすることにした。所蔵図書にはほとんど無かったので購入しなければならなかったのがリストを作成したのだが、これが結構たいへんだった。高校生は図書館用語で「ヤング・アダルト」(13歳~17歳)と呼んでいる年令で、最も選書の難しい年齢層とされている。東京都高等学校図書館研究会で、読書への導入剤としてマンガを入れるという提案があった。試みてわりあい効果があったので、池田理代子のマンガ『ベルサイユの薔薇』も入れた。ツヴァイクの『マリー・アントワネット』を借りた生徒がいたので、きっかけを与えるためにマンガを活用のも一つの方法なのだったと思った。同じ著者の『フランス革命の女たち』もグラフィックなものだが、説明の文章が読みやすいこともあってよく読まれた。若い世代はビジュアルなものは読むので、新聞広告にあった『フランス革命』*がイラスト版となっていたので購入してみた。イギリスで出版された物の翻訳である。FOR BEGINNERS というシリーズ物の第一回配本であったが、多分フランス革命200年を意識した出版だったので。目録作成前に落丁・乱丁を調べるためにパラパラめくってあれと思う所があったので、丁寧にめくっていった。

まずはアニメ王国日本の作品を見慣れている私にはイラストが随分雑に見えた。もっともイギリス版のイラストをコピーしたようにも見えるので日本版の編集の仕方かもしれない。内容は革命前夜からブリュメールのクーデター、周辺の国々への影響、芸術や科学への影響に至るまで含まれていて、日本の革命史の本よりも視野が広い。高校生のための入門書としては手頃であろう。でも訳語に誤りが散見し訳文も解りづらいところが多いのが残念である。原書の誤りということもあるが、その場合でも訳者が訂正してあとがきなどで断ればよい。下記にその例を少し挙げて置く。

10頁：王家の人びと

3；ポリグニャック公爵夫人。王妃の親友。～ポリニャック公爵夫人。

王妃の親友も王家の人か？

5；フェルセン。スコットランドの伯爵。～フェルセンはスウェーデンの人。

王妃の愛人も王家の人？

41頁：警察が民衆との・・・警察など革命時代にあった？

57頁：関接税。～間接税？関税？

66頁：スウェーデン公爵フェルセン。～スウェーデンの伯爵フェルセン。

158頁：1000年もの歴史が我々を見守っている・・・5000年の歴史が・・・

重箱の隅を突いているようだとと言われるかもしれない。しかし大学生なら間違いが解るかもしれないし、在学中に知識が訂正されるチャンスもあるかもしれない。しかし高校卒業後社会に出てしまう生徒もいる。すると誤りに気づく機会はほとんどない。何かの拍子にそのことで彼らが恥ずかしい思いをすることもある。だからこの様な入門書はとくに丁寧に制作してもらいたいのだ。思い切って書店に電話をした。丁寧な対応だった。この本は結構読まれているらしく、最近も書店で見かけたがかなり訂正されていた。

定年退職後、喘息の治療や足のリハビリをしながら少しずつ翻訳をしていたが、自分の力不足を思い知らされた。でも調べながら訳していくのは楽しく、ちょっと焦りながら続けていた。でも突然左目がほとんど見えなくなり断念せざるを得なかった。幸い名医に巡り会い、大手術を受け完全失明は

免れた。術後2年あまりになるが、いまだ左目は物の外形が解る程度で、右目をふさぐと大きい看板の文字も読めない。一年半をすぎた頃主治医の上野教授（聖マリアンナ医科大学）から、「血液はきれいにとれているから、もう少し見えて良いはずです。見る訓練をなささい。」と言われた。その時昔読んだ認証心理学者鳥居修晃の論文「先天盲の開眼手術と視知覚の形成」**を思い出して、読み直した。20年以上も前の論文であり、医学が進歩した現在に通用しない部分もあるかもしれないが、興味深い論文である。開眼手術を受けた人が晴眼者のように物や色を見分けられるようにはならず、最初は触覚の助けをかりるのだそうだ。10年後に見る訓練を始めて急速に物の形や色を見分けるようになったのだそうだが、晴眼者のようなわけにはいかない。開眼手術を受けた人の中には、触覚に頼って暮らしていた頃のように物をはっきり感じ取ることが出来なくなって、不安定になり元に戻して欲しいという人もいたそうだ。私は片目だけだったし、手術を受けたのは66歳でだったし、それまではだいたい普通に見えていたから、論文で紹介されていた開眼者とは比較は出来ないが、見る訓練ということがいかに大切か再認識した。専門家でなくとも理解出来る論文なので、ディドロやモリヌクスに関心のある方は一読をお薦めします。

幸い高齢化社会になったせいか新聞も本も活字が大きくなっている。買溜めた本は文字が小さいのでまだ無理と思い、書店で面白そうと思った本を買ってきて読み始めた。焦りが出るので専門書は避けた。注の文字が小さいのが多いのでまだ目に負担が大きいと思ったからだ。『マリー・アントワネットの調香師 ジャン・ルイ・ファージョンの秘められた生涯』***もその一つである。資生堂が翻訳に協力していて、帯に読者に抽選で香水をプレゼントしますとあった。（時期は過ぎていた。）装丁などからも一般の比較的若い女性向けの軽い読み物と判断して、気晴らしに読むのに良いと思って買って帰った。

読んでみると内容はかなりレベルが高く、教えられることも多かった。著者はソルボンヌで「香水商」という論文で博士号を取得し人で、ヴェルサイユ香水学校教授（こんな学校が存在することも知らなかった。）だそうだ。これまで香水産業の発祥はグラスだと思っていたが、実際はモンペリエだった。モンペリエ大学の医学部は早くから実験医学を取り入れており植物園も持っていた。香水の原料の多くは植物で、それからエッセンスを抽出して調合して香りを作り出すのだから、調香師は一種の化学者であり薬学者あったといえる。医学部のある大学都市は香水産業が発達するに適した環境があったのであろう。

しかし香水の最大の消費地はパリであり、ヴェルサイユであった。それでファージョンはパリに出て、商売発展に努力を重ねついに宮廷出入りの香水商となり、特にマリー・アントワネットに気に入られ香水や入浴剤を納入する。宮廷御用達商人の肩書きは店の信用にもなり、パリの店もおおいに繁盛したようである。しかし大量に購入する宮廷からの支払いが滞りがちになっている。ファージョンは財政の破綻を察知し、反面、店の顧客であるブルジョワが経済力を付けてきているのを見てきた。それ故か彼は革命が起こったときに御用商人であったにも拘わらず革命の側についた。一時革命政府に投獄されたりもしたが支持は一貫して変わらなかった。様々な困難にも拘わらずフランスが絶対王政に後戻りしなかったのは、宮廷から利益を受けていた人びとからも見捨てられていたことも大きかったに違いない。香水と調香師を中心に時代の社会変化を巧みに描いている。他にモンペリエの香水産業の簡単な歴史、香水の製法、香水と関係の深い手袋の製造等々、参考文献とその所蔵機関一覧もあるので、もっと勉強してみようという人には格好の入門書である。ただ残念なことに誤訳が多い。もし私が現役の司書であり、利用者から香水の歴史についての文献を相談されたら、これは紹介しないであろう。幾つかの例を挙げてみる。

54頁：マリー・アントワネットの肖像に付けた説明。

オーストリア大公妃マリー・アントワネット＝ローレヌ・ハプスブルグ。

～オーストリア皇女マリー・アントワネット、ロードリンゲンはフランス語ではロレーヌなので誤りとは言えないかもしれないけど？

88頁：王妹エリザベットの肖像に付けた説明

エリザベット夫人は・・・彼女は生涯未婚だった。多分madameの訳であろうが、女城主，女主人の意味。訳しづらいことは確かで、王妹とか内親王と訳することが多い。

118頁：勤務連帯～勤務連隊。 王女を護ろうとした。～王妃を護ろうとした。

二つとも多分変換ミスと思うが。 . . .

165頁：理由の女神～理性の女神

166頁： 28名の農民ら一かつての税金徴収係たちが. . . ラヴォワジエも含んでいた。

原文を見ないとはっきりしないが、28名の徴税請負人が処刑されたときラヴォワジエはその中に含まれていた。”税金徴収係”は農民という言葉の説明したつもりなのか？多分”フェルエ”の意味をはっきり理解していないのだろう。

原文を見ていないので正確な判断は出来ないが、他にも誤訳と思われる箇所が多く、訳文の意味もはっきりしないところが幾つかあった。良い本なのに残念である。

ここに紹介した2冊の本の訳者は英語なりフランス語なりを流暢に話せる人なのであろう。たぶん現代のことについての本なら巧みに訳せたかもしれない。しかし歴史の本は歴史を知らなくては訳せない。歴史家でなくともフランス革命史とマリー・アントワネットの伝記でも読んでいれば誤訳の大部分は避けられたであろう。担当した編集者にも大きな責任がある。編集者は著者・訳者の仕事をチェックしなければならないのだから、担当する本について深く理解していなければならないはずである。かつてフランス国立図書館員の講演を翻訳したことがある。その時団体名を適当に訳してしまい、編集担当者から定訳があると指摘されて冷や汗をかいたことがある。有能な編集者のおかげで恥をさらさずに済んだ。本を作るということは著者・訳者の共同作業なのだと思う。

本が売れなくなったと言われる。だからといってこの様に読者を軽んじたような本を出版することは許されないのではないか。本を作る側と読む側の仲介役である司書を長らく勤めてきたが、責任持って勧められる本を探すのは大変だった。特に高校生のようにたくさんものを吸収する年代にいい加減な本は勧められない。

退職し周辺の人びとや通院先で出会う人びとと話することが多くなって驚くことが多い。新聞を読まない人が結構いるし、雑誌は見るものだと思っている。マニュアル本は、必要なら読むけど、借りるか立ち読みですます。テレビを持たない私は、話題探しに苦労している。時々日本語が日本人に通じないと思うことも多い。フランス革命のことなど誰でも知っていると思っていたのは間違いだった。テレビで取り上げる単なるお祭り騒ぎにすぎなかったのだ。本の編集者の知識もこの程度なら驚くに当たらない。

本の書き手も解りやすい表現を心がけて欲しい。各分野の大御所が子供に解りやすい本を書いても権威に傷が付くまい。本を出しても仲間内でやりとりして、後は大学図書館で買ってくれるだけではあまりに寂しいし、後に続く研究者も育つまい。精緻な研究書も必要だが、日本の高価な研究書は発行部数が減ってゆきますます高くなるばかりである。欲しいと思っても個人ではなかなか買えないし、図書館も予算は減るばかりなのですべてを買うわけにはいかない。

入試の面接の時に「最近読んだ本で良かったのは？」と聞かれるから何か適当な本はないですか、とよく相談された。何冊かを内容を紹介して渡すと、熱心に目を通して選んでいく。これがきっかけで読書を始める生徒が結構いた。だから司書は深くよりも広く読まなくてはならない。また選書にも神経を使う。著者は解りやすい本を、編集者は正確で丁寧な本作りを心掛けて欲しいと切に願う。また出版社も良き編集者を育てて欲しい。

学会で川島慶子氏がシャトレ侯爵夫人について 発表したときマンガ（イラスト？）付きのレジュメがあったが、解って欲しいという気持ちの表れだと思って好感が持てた。その後出版された著書も理解しやすく得るところも多かった。18世紀学会は他の学会に比べて幅広い分野の研究者が集まっているので、解りやすい発表でなければならない。数学者の村田全氏が「18世紀学会はサロンの性

格を残している」と言っておられたことがあるが、だから私のような仕事をしてきた者も気楽に参加出来たのだろう。金儲けに繋がらない研究をしている者には厳しい時代である。学生時代に聞いた話だが、古代ギリシャの哲学者が人に教えようとしたが誰も集まらなかったのも、ある男に金を与えて講義をしていた。しかし厭になってもう止めたと言ったらその男がお金を払うから続けてくれと言ったのだそうだ。研究者が忍耐強く市井の人に語りかけなくては、今日の閉塞状態は抜けられないと思う。18世紀学会の役割はそういうところにもありそうな気がする。

- * 『フランス革命』 文/ロバート・モウルダー、イラスト/マーティン・マクロイ、訳/ 田中茂彦、現代書館、1985年。
- ** 鳥居修晃「先天盲の開眼手術と視知覚の形成」、『サイエンス日本版』、1983年7号、日経サイエンス社、pp. 28-39.
- *** 『マリー・アントワネットの調香師 ジャン・ルイ・ファージョンの秘められた生涯』 エリザベット・ド・フェドー著、田村愛訳、原書房、2007年。

..... Spring has come.

崔 康勲 (法政大学、建築学)

建築のある風景を、あるがままに事実として受け入れ感得すること、あるいはそこから発生する想念に従い、自ずからあるべき世界を創出すること、よって、建築論とはそのような建築術の哲学的な反省でなければならない。こうした制作と思索の過程にあって、「18世紀的なもの」とでもいふべき何か、感覚として、あるいはエートスとして、「私」を支配している。

1960年代の後半、韓国の総合雑誌への知識人という語の登場から書き始めたい。知識人の対概念は大衆であろうか、違和感を禁じえなかった。というのも、1960年頃までは、知性人が専ら用いられていたからである。インテリゲンチヤが直訳されたのかも知れぬが、大学人そして学生と民衆との信頼関係に距離があったとは思われない。かれらの発生母胎は、覚醒した両班階級であった。韓国近・現代史を紐解けば明らかだが、彼ら知性人にとって、愛国と啓蒙は一つのことであった。

その1960年代後半、近代日本が獲得したリベラルな校風の中で、高校生活を送ることができた。世界史を担当された先生は、精緻な理論と情熱を駆使し、生産力の発展と生産関係を土台とした諸党派間の軋轢と抗争のダイナミズムとしての歴史を開陳された。とりわけ清教徒革命から1848年の革命に至る政治過程は、イギリス・フランス（啓蒙期）・アメリカ・フランス（革命期）・ドイツへと主舞台を移し、魅了した。ハイライトはフランス革命の講義の終了間際、チャイムが鳴るまでに少し時間をいただきたいとの生徒の了解を得て、「ラ・マルセイエーズ」が教室に響いた。もう一つ、いわばヨーロッパ思想史をなぞっている感があった倫理・社会という授業があったが、とりわけデカルトあたりからアクセルが踏まれ、カントにいたって理性への信頼と永遠平和論が講義された。

生徒たちは講義に関心しつつも冷静であった。すでに『二都物語』を読んでいた私は、革命といえども暴力に他ならない、との思いから自由とはなりえなかった。ベトナム戦争は本格化し、昭和元禄という虚構にも馴染めなかった。親しかった上級生は理性の不安に悩んでいたし、知の限界を見極めようと苦しんでいた。彼は学生服のポケットに『純粹理性批判』を入れていた。しかし、知の根底を純粹に問う余裕は私にはなかった。

恐れていたのは、そしてそれはやがて現実となったのだが、母国の参戦にあった。理由はともあれ、他国への出兵の歴史を有しないという民族史への自負に対する冒涇と感じられた。現実に直面して働く知性の唯中において、同時に不変的な知の根拠を問うことが問題であった。私にとっての18世紀体験であったのかも知れない。

ところで、本学会入会に際し、テーマとして、18世紀イギリスと朝鮮における都市・庭園・建築とモラルティと記したとおり、寄稿のお誘いに対し、当初はそのような内容を考えていた。

この間、18世紀思想の源流を求めてモラル・フィロソフィの水脈に触れ、シャフツベリ伯爵の存在を知ったこと、またエマヌエル・コレッジを訪ねた折には、学寮の佇まいにケンブリッジ・プラトン学派の幻影を視たこと、彼地でのジョージアンあるいは母国での李王朝の空間に身を委ね、深い安らぎの中に懐かしさを覚える瞬間の美意識、そして、日々の早朝の部屋での英国で作られたコーヒーテーブルと小さな李朝の磁器が醸し出す不思議な感覚、などについて書いておきたかった。生涯の課題である歴史感と一体と化した受動的媒体性の意匠術の地平が開かれるはずである。

しかし、このたびの大震災という想像を絶する光景を目にして、いま言葉を失っている。この困難を乗り越える方途を見いだすためにも、『啓蒙主義の哲学』と『啓蒙の弁証法』の著者たち-亡命者たちとの喫緊に架空対話をいま再び試みてみたいと直観している。真に己の蒙を啓き、実践する勇気を通じて、言葉に依拠する建築論の根底からの立て直しを考えている。

閑話休題。日本の公立中学校へ移っての楽しみの一つは、英語との出会いであった。私の属する学年だけでも生徒数は780名、15クラスという都内でも有数のマンモス校であったが、在学中の3年間を通じて、韓国名の生徒は私一人だけであった。そんな孤絶感からの解放とでもいうか、英語に遊ぶことのできる時間は束の間の休息を与えてくれた。

ある時、庭でワーズワースの詩を暗誦していると、父がやって来て、植民地下での中学生の頃、内村鑑三門下の同胞の教師から教わったというシェリーの詩を詠んでくれた。

O wild West Wind, thou breath of Autumn's being
Thou, from whose unseen presence the leaves dead
Are driven, like ghosts from an enchanter fleeing,

.....
.....

Scatter, as from an unexinguish'd hearth
Ashes and sparks, my words among mankind!
Be through my lips to unawaken'd earth

The trumpet of a prophecy! O Wind,
If Winter comes, can Spring be far behind?

父はしばらく黙って空を見つめていた。そして、自分自身に語り聞かせるように、きまって、いつもこう続けるのであった。

..... Spring has come.

この一節は、シェリーの詩には存在しない。植民地下の青年たちによって加えられ共有された感覚であり、確信であり、希望であったのかも知れない。少年の頃与えられた『千字文』ともども忘れられない思い出の一つである。(2011年4月)

ラセラス王子の新たな旅

原田 範行 (東京女子大学)

大学の専任教員になって20年。着任当初に決意しつつも今日まで継続しているものは数少なくなっ
てしまったが、その中の一つに、「毎年、最低2週間は英語圏に出かける」ということがある。私に
とって母国語ではない英語で読み継がれ、語り継がれてきた言語文化を研究教育において扱う以上、
これを崩しては意味がないと心に決め、愚直に守り続けてきた。たとえ、18世紀イギリスのテキスト
や事象が対象であっても、それは現代の英語圏の人々の言葉の節々に、あるいはその生活のさまざ
まな局面にひょっこり顔を出す。そういうものを感じつつ、研究成果を英語で発表するというのは、当
たり前と言えは当たり前だが、日本にあってそういう習慣を多少なりとも日常化するのは、確かにい
ささか骨の折れることではある。本当はフランスにもドイツにも行きたい、日本の大震災の渦中に
1755年のリスボン大震災を想起した私は、すぐさまポルトガルにも出かけてみたくなった。しかしそ
こまで自由自在に、「18世紀学会」的には足を延ばすこともままならない。せめても、というわけ
である。

そういうわけで昨夏も、ロンドンに3週間、アメリカに1週間滞在し、学会出席と資料調査の機会を
得た。ただ今回の滞在がいつもと違ったのは、滞在中に二度ほど、日本について話してほしいと頼ま
れたことである。日本と言っても、マンガやアニメ、経済や産業の話ではない。専門とする18世紀イ
ギリスの文学作品が、日本でなぜ、どのように受容され変容したのか、そしてそれが、原作に新たな
生命を吹き込んだとすれば、それは何か、ということ英米の学生に分かりやすく話してほしい、と
いうわけである。依頼人の一人は、アメリカ・ペンシルヴェニア州にあるバックネル大学のグレッグ・
クリンガム教授。18世紀イギリスの文豪サミュエル・ジョンソン研究の第一人者の一人だが、2003年、
UCLAで開催された国際18世紀学会 (ISECS) の折に、シンポジウムでいっしょにパネルを組んで以来、
親しい友人となった。2009年に彼が来日した際には、10日あまりの滞在期間中、日本ジョンソン協会
のほか、東北、慶應、名古屋の各大学で話してもらった(関西18世紀研究会はインフルエンザで中止)。
もちろんこちらも、今回の申し出を断る理由はない。

私は最初、そんなこと、わけはない、と思った。実際、クリンガム教授とのシンポジウム以来、そ
ういう話題を何回か国際学会で発表したことがあるし、18世紀イギリス文学そのものについては、イ
ギリス18世紀学会 (BSECS) をはじめ、ほぼ毎年、何らかの話をしてはいる。学生諸君だって、こち
らが慣れない英語ながら一生懸命話せばなんとか分かってくれるだろう、彼らのモチベーション
は非常に高い一など高を括っていたのである。英語の講演だから、草稿もロンドンで耳と口を慣ら
してから書けばよいと、おそろしく身軽かつ気軽に、私はロンドン・ヒースロー空港に降り立ったの
であった。

だがこれは実に迂闊なことであった。そもそもよく聞けば、学生は文学を専門にしているとは限ら
ない、という。「なぜ日本で英文学を」という、それだけでもややこしい話の前に、まず「なぜ文学
を」の話をしなければならぬらしい。しかも聴衆には、歴史や国際関係論の研究者も混ざっている
という。そして先方はあくまでも、日本での受容と変容を経て原作に吹き込まれた「新たな生命」に
こだわっている。「それこそが今回の君の講演の要だ」などという、妙に意気揚々としたメールが、

ロンドンにいる私のもとにアメリカから届いた。おまけに、これも当たり前と言えば当たり前のことながら、イギリスにおいては日本の史料が思うように見つからない。「イギリスにいればすぐ分かるのに」と日本で嘆いたことはこれまで多々あったが、イギリスにいてこれほど「日本にいれば」と思ったことはない。イギリスが世界に誇る大英図書館で、しかし私は、日本のこと、日本人である自分のことを思い、鬱々たる気分で草稿執筆に取りかかった。

「イギリス文学と日本人」という問題を考える際、私たちがまず真っ先に思い浮かべるのは、おそらく夏目漱石の経験した苦悩であろう。だが私は、少なくとも今回の講演では、漱石の苦悩に言及することを好まなかった。東京大学の記録では、1879年、アメリカ人英文学者ウィリアム・アディソン・ホートンが、いち早くサミュエル・ジョンソンの『ラセラス』を講義で扱ったことになっている。『ラセラス』（1759年刊）とは、アビシニア（エチオピア）の第四王子ラセラスが、生活に何不自由のない、しかし王族として閉じ込められている幸福の谷を、妹や家庭教師などといっしょに抜け出し、真の幸福とは何か、そのための人生の最良の選択とは何かを探求して旅する物語で、結局一行は、「何も結論のない結論」に至ってアビシニアへ戻る、という話だ。そういう話が、明治期の日本では、ホートンの講義をきっかけに全国に広まって行き、驚くべきことに、19世紀末までに、少なくとも6種類の翻訳と2種類の評訳が出版された。そしてその翻訳は、ちょうど当時進行しつつあった日本語の言文一致運動と期を一にして、日本語そのものの変容をみごとに体現するものともなっているのである。そこに見られる日本人と日本文化のダイナミズムを、漱石の苦悩にのみ収斂させるのは、やはり不可能である。私は、17世紀後半から18世紀にかけて、イタリアやフランスのアカデミーなどに触発されて展開したイギリスの英語改革と、小説やジャーナリズムをはじめとする散文文化の発達にちらちら言及しつつ、『ラセラス』が、『ロビンソン・クルーソー』が、『ガリヴァー旅行記』が、幕末以降、日本で受容された過程を語り、旅行記かつ人物伝という文学形式が洋の東西で発展してきた経緯を説明した。『南総里見八犬伝』や『東海道中膝栗毛』から『三四郎』に、そして能、文楽、歌舞伎にも触れた。他方、18世紀イギリス文学を中心に、それ以前のシェイクスピアやベン・ジョンソンといったイギリス・ルネサンス演劇、19世紀のウォルター・スコットやディケンズ、カーライルなどの作品も引っ張り出した。言語改革と近代社会を構築した散文による文書文化の話もした。そして結局、近代とは何だったのかという問いを聴衆に向けてみた。散文文化の最も典型的な小説という文学ジャンルにいささか違和感を禁じ得なかったジョンソンの、「何も結論のない結論」に至る小説を軸にして、である。

「新たな生命」について、いったいどこまで理解されたか、定かではない。多くの建設的で好意的なコメントや質問、そして会場での拍手喝采に酔いしれる迂闊さは、もはや私にはなかった。眼前に横たわる大きな問題と課題に対して、肅然と襟を正すこと以外にはできなかったのである。ただ一つ、非常に興味深かったのは、私がかろうじて持参した『ラセラス』の初版本（8折本2巻、ロンドン刊）と翻訳古書『王子羅世刺斯傳』（上田敏校閲、芝野六助訳述、明治38年刊（東京））、そして、先方が予めいろいろ用意してくれたホートン関係の原資料を、聴衆が、特に学生諸君が、実に不思議な面持ちで見入っていたことだ。私が持参した『ラセラス』は、ロバート・ドズリーという18世紀ロンドンを代表する出版者による正真正銘の初版本だが、2巻合わせて少なくとも7箇所、1ページあたりの行数に物理的理由を考えにくい不統一が見られるという変わりもの。おそらくその中の幾つかは、作者ジョンソン自身による直前の駆け込み改稿によるものと言われている、誠にのどかな人間味あふれる出版物だ。『王子羅世刺斯傳』は、明治期の『ラセラス』翻訳を代表する逸品。上田敏はその「序詞」において、「ジョンソン嘗て曰くポウプ氏のホメエロス訳は真に巧なる詩也、而もこれ実はホメエロスならずと。（略）芝野氏の訳に於て最も喜ぶ所は、拙速を尚び、散漫を厭はざる世の所謂言文一致体に依らず、時流の好に投ぜざる一種の漢文和訳体を以て、原文の佛を伝えむとしたる一事なり」と、明快に記している。他方、イエール大学を出た後、日本で教鞭を取り、帰米してからマサチューセッツ州のボードン・コレッジで古典語や英文学を講じたホートンは、その名前のみ日

本の英学研究者によく知られているが、来日以前も以後も、その足跡と業績についてはアメリカでもあまり知られていない。だが、イエール大学の卒業生名簿や、晩年に彼が刊行した『池一少年時代の物語』という小さな詩集や『日本の思い出と明日』というごく短い文章などが並ぶと俄然、現実味を帯びてくる。そういう決して遭遇するはずのなかった現物が二一世紀になって不思議な邂逅を果たしていること自体に、学生諸君はどうやら驚嘆したらしいのである。別に横書きのものが縦書きになっていることだけに興味を示したのではない。初版本の持つ不思議な人間的魅力に、言説の広がりを示す翻訳古書から立ち上る熱気に、その両者を結んだ一アメリカ人の寡黙な生涯に、そしてそれらが今、目の前であたかも互いに会話するかのように並んでいることに、彼らは感銘を受けたらしいのだ。

「新たな生命」の一半は、あるいはこういうことなのかも知れない。ラセラス王子の旅に、相変わらず結論はないのだが、しかし彼は確実に、新たな旅を始めているのではないか、そういう錯覚を私は覚えた。錯覚かも知れないが、しかし私は、この時の印象を心に深く刻んで、今後の研究教育に精進したいと思っている。



事務局より

国際18世紀学会役員選挙について

国際18世紀学会では、4年ごと（大会の年）に役員選挙が行われており、2011年はその年に当たります。投票は、郵送か電子投票のいずれかを選べます。要領は別紙をご参照ください。郵送の場合は、同封の投票用紙、封筒を使って投票してください。投票締め切りは2011年6月15日です。なお、今回は小田部胤久会員が執行委員候補になっています。

※同封の関係書類は、投票用紙のほか、投票要領と候補者紹介がセットになっています。（A4ウラ表8枚。）投票用紙は、役員用（Officers / Bureau）執行委員用（Members / Membres ordinaires）の2枚で、それぞれ英語版、フランス語版がウラ表になっています。

2011年グラーツ大会情報

前掲の記事にもありますように、国際18世紀学会の第13回大会は2011年7月25日（月）から7月29日（土）まで、オーストリアのグラーツで開催されます。

大会関連のサイトがすでに開設されています（www.18thCenturyCongress-Graz2011.at）のでご覧ください。

日本からも多くの会員が参加されることを期待します。

会員名簿について

2011年版会員名簿ができあがりましてのお届けします。訂正等がありましたらお知らせください。

国際18世紀学会の名簿について

すでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴァル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org>）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、その旨連絡してください。

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

国際学会へのメールアドレスの連絡は、来年に予定されている国際学会の執行委員の選挙に際しても特に重要です。来年の選挙は、メールでの投票と、郵便での投票の二通りの投票の仕方があり、グラーツ大会その場での投票はできません。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

以上ホームページ関係の連絡は、Pascal Bastien. admin@isecs.orgまで直接行なってください。

※日本18世紀学会事務局でチェックしたところ、誤ったデータ（すでに退会した会員のデータ、名前の誤表示など）が多数見つかりましたので、わかる範囲内で事務局で訂正いたしました。新入会員の方、連絡先等に変更のあった方はなるべく自分で上記アドレスに申告していただくか、ご自分のデータを更新してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（画面上部のISECS-Directというボタンをクリックすると名簿にアクセスできます。）

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りまします。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、9月号は7月半ばまでに、12月号は10月初めまでに、4月号は2月初め頃までに、ご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費の払い込み用紙を同封させていただきます。未納分のある方には、その年数に応じた金額を印字した用紙を送らせていただいています。学会の活動は皆様の会費に

よって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。

00950-2-178903 名義：日本18世紀学会

寄付のお願い

別紙要領をご覧ください。（今回はこの「学会ニュース」最終ページになっています。なお、昨年の寄付要領に記載されていた学会の口座番号に間違いがあったようです。大変失礼しました。今回お届けするのは訂正版です。）

寄付のお礼

昨年、寄付の受付を開始しましたが、「学会ニュース」前号以来、以下の方々から寄付がありました。お礼申し上げます。

筑波常治 10口 10,000円 名 1計 10,000円

学会への献本のお知らせ

隠岐さや香会員から以下のご著書を学会にご寄贈いただきました。お礼申し上げます。

隠岐さや香著『科学アカデミーと「有用な科学」 フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』名古屋大学出版会、2011、v+384+135 p.

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一、井田尚、伊東貴之(東アジア交流担当)、王寺賢太(国際幹事)、小田部胤久、笠原賢介、川島慶子、小穴晶子、関谷一彦(常任幹事、年報担当)、田邊玲子(常任幹事、年報担当)、寺田元一(国際学会執行委員)、長尾伸一(東アジア交流担当)、中山智子(常任幹事、総務・会計)、服部典之(常任幹事、年報担当)、堀田誠三、増田真(代表幹事)、吉田耕太郎(常任幹事、年報担当)

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第66号 2011年4月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田(仏文)研究室

e-mail: jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp

tel. / fax: 075-753-2766

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>